

『嶽水會雑誌』でも縦横に健筆を振つて、諸方面、殊に運動部に八ツ當りし、その道の猛者から鐵拳のお見舞を受けようとしたこと也有つたが、強氣の一點張りで、ひるまず押し通してしまつた。『史學雑誌』の編輯には自分も學生委員として加はつたが、大方針を立てる編輯會議には、史學會の評議員であつたえらい諸先生も出席されて方針を定めるのが常で、大家揃ひだけに相當に議論も多かつた。かゝる場合に論議の中心はいつも若い學士の濱田君であつた。此の頃の同誌の發行については、財政上の困難が少くなかつたので、用紙の如きはひどく粗末なものであつた。それを三上先生が氣にせられて、も少し良いものを用ひたがよからうといはれたのを、經營上の慘憺たる苦心を了解しないものとして、濱田君が猛烈に突きかゝり、遂に先生をしてその提議を撤回せしめた。その論議中に那珂博士が口を出されて、「僕は紙の善惡などはどうでもよいが、此頃の『史學雑誌』のやうに誤植の多いのは困る」といはれた。紙質問題にやつと鳴をつけた濱田君は、新たに那珂博士に向き直つて、「先生は雑誌に誤植が多いといはれます、三校も四校もとつてなほ且つ殘る誤植で、これは神ならぬ身の致方もないことです。あなたの『成吉思汗實錄』には誤植はありませぬか」と毒づいた。議論に於ては名うての先生のことである。殊にその頃出版された『成吉思汗實錄』は、博士の精根を盡しての大著で、すべてに於て自負せられた所も多かつただけに、勿論そのままでは納まらない。失禮ながらあの甚だ端麗ならぬ顏面に舌なめづりを加えながら、「ハー今度は僕に向つて來た」といひながら、「誤植は神様でなくとも少くすることは出來る。我輩の『成吉思汗實錄』に、四頁に一つの誤植があつたら首をやる」といはれた。互に猛烈なことで、遂に首を懸けての喧嘩になつてしまつた。しかし會議を了つての歸り途には、濱田君はもうケロリとして、誤植も首も忘れてしまつた様子で、いつものやうに先